

《正岡子規（36）の続き》その296

天涯茫茫生

列伝⑬ 五百木飄亭

生年 一八七〇（明治三・一二・二四）
 歿年 一九三七（昭和一二・六・一四）
 享年 68歳
 死因 胃ガン

はじめ俳人、のち新聞記者を経て所謂国士。本名良三、伊豫松山に生る。幼時から非常の秀才で、十五、六才の頃、笈を負って大阪に出て、同地の小野田医師の下で医術を学び、19才の丁年未滿で、医師開業試験の前期、後期に合格し、医師免許証を得たが、終生医業としなかつた。

壮年、戦時中二次にわたり首相となつた近衛文麿の父、公爵近衛篤麿に知られて公の持論に共鳴し、東洋平和、対外硬論を主唱し、同志と共に活動し、国士を以て遇せられた。晩年、雑誌「日本及日本人」を主宰し、死去の後には、同誌は全巻を「五百木良三追悼号」（第三百五十一号、昭和12年8月号）として発行した。巻頭には、最後の病床を見舞つた近衛首相の写真と追憶文を以て飾つた。

明治22年、上京して旧藩主の設立した常盤

会寄宿舎に入り、正岡子規を知り俳句の道に進み、その力強い句風は子規に「曠達」の二字で評された。

当時、子規が従来の月並調を脱し革新を唱えはじめていて、得た同志には新海非風、飄亭、藤野古白、少しおくれて先輩の内藤鳴雪、次いで碧梧桐、虚子など郷里を同じくする人々が輩出した。古白は子規のいとこ、鳴雪は恩師にあたる。

飄亭は徴兵検査に合格し、明治23年から3年間近衛師団歩兵聯隊に入営したが、その間も子規とは絶えず文通し、句作をしていた。

講談社版「子規全集」書簡編には、飄亭宛のものが36通も載っている。その期間は明治23年7月から、子規の死の前年の34年1月に及んでいる。かなり親密な交際を続けていたことが分る。殊に30年11月4日発のものは、怖るべき長文で、飄亭の置酒豪遊の生活を諫めた忠告文である。そこでは妻帯と読書をすすめている。

ついでながら「子規全集」別巻1子規あての書簡集にも、飄亭は47通をのこしている。置酒豪遊に対する返書もある。

現役除隊して、いったん郷里へ帰る途、京都に立ち寄り三高在学中の虚子と碧梧桐を訪ねたとき、殆んど一步に一句というくらい多作で、二人を驚かしたことは虚子が書いている。

日清戦争がはじまると飄亭は召集され、医師の免許がありながら看護長（衛生下士官）として、広島第五師団衛生隊に従軍、各地に

転戦すること約9カ月であった。その陣中匆忙の間に日々の戦況その他見聞の詳細を「従軍日記」として七十三編を記述し、添えるに毎日の作句（四百八十句）を以てし、これを新聞「日本」に犬骨坊の筆名で投じ好評を得た。飄亭が最も句作に熱中したのは子規に従つた明治22年から10年くらいで、句会に於ける作句以外ひとりで句想に耽り、何々十一カ月、何々百句とかを連続して作り上げて、子規その他の句友に廻覧して批評を求めるほどの熱心ぶりであった。

明治27年2月、「日本」新聞は、政府の忌諱に触れればしばしば発行停止の厄を被つたので、代用言論機関として「小日本」を創刊、「日本」から出て子規が主筆となつて、飄亭を記者として迎えたが、飄亭は召集されて出征、いくばくもなく「小日本」も廃刊となり、子規も「日本」に復帰した。

凱旋した飄亭は28年冬「日本」に入社。子規は結核発病に際し、余命をほぼ10年（実際にはそれより数年延びたが）とし、自己の文業の後継者を虚子と定めた。殊に日清戦争に従軍して、九死に一生を得て死は近いと思ひ定めた。

そこで明治28年12月9日、虚子を道灌山に伴い、茶店で後継者としての自覚を求め、学問をしないことを問いただす。虚子は「学問する気はない」と答え、子規は絶望する。

その失意の第一報を「小生が心中は狂乱せり、筆頭は混雑せり」と長文を飄亭に報じた。